

## 西北地区統合校開設準備委員会（第1回）概要

日時：令和元年5月28日（火）

9：30～11：15

場所：県立五所川原工業高等学校 3階 視聴覚室

### <出席者>

#### ○委員

福原 直樹 委員、平川 昌史 委員、隅田 佳文 委員、幸山 勉 委員、  
尾野 勝 委員、成田 正義 委員、藤田 重彦 委員、阿部 広悦 委員、  
長尾 孝紀 委員、永澤 正己 委員、佐井 憲男 委員

#### ○オブザーバー

県立金木高等学校

加藤 聖子 教頭、佐藤 泉 事務長、今 譲 教務主任

県立板柳高等学校

中畑 要 教頭、山本 美千代 事務長、東海 賢治 教務主任

県立鶴田高等学校

川嶋 幹二 教頭、外崎 和子 事務長、山内 拓雄 教務主任

県立五所川原工業高等学校

津島 節 教頭、橘 壽雄 事務長、工藤 和樹 教務主任、

成田 秀造 工業科主任

### 1 開会

### 2 委嘱状交付

■ 佐藤教育次長から各委員へ委嘱状を交付した。

### 3 設置要綱説明

■ 事務局から資料2により設置要綱の概要について説明した。

### 4 委員長及び副委員長選出

■ 委員長に佐井 憲男委員、副委員長に幸山 勉委員を選出した。

### 5 事務局説明

#### (1) 青森県立高等学校教育改革推進計画第1期実施計画

■ 事務局から資料3により第1期実施計画の概要について説明した。

■ 委員から次のような質問があった。

- 令和3年度の西北地区統合校開校に当たり普通教室の数が不足するとのことだが、開校する際には施設整備は済んでいるという理解で良いか。  
→ (事務局) そのとおり。施設整備は令和2年度までに進めることとしている。

## (2) 西北地区統合校の設置に向けた検討の進め方

- 事務局から資料4により検討の進め方について説明した。

## 6 学校紹介

- 委員長から統合対象校の校長に対し、それぞれの学校の状況について説明を求めた。

### ○金木高校 (福原委員)

本校の教育目標は「地域に根ざした教育」及び「少人数制によるきめ細かな教育」である。

本校では少人数制により生徒一人一人に丁寧な学習指導を行っている。具体的には習熟度別に学級編制するとともに、第2学年からは生徒の進路志望に対応できるようコース制によりきめ細かい学習指導をしている。A類型は主に就職や専門高校への進学を希望する生徒、B類型は主に大学進学や公務員を目指す生徒に対応している。A類型の特徴としては、普通科目に加え商業科の専門科目等を開設している。また、A類型、B類型に共通した特徴的な学習として、第3学年に学校設定科目として開設している「時事研究」がある。「時事研究」では新聞を授業に取り入れるNIEにより、時事的な問題について議論し意見発表することで、アクティブ・ラーニングや主体的・対話的で深い学びにつなげている。

もう一つの教育目標である「地域に根ざした教育」では、津軽の伝統文化を学ぶ郷土理解学習、地域の自然を調査・研究する野外学習、太宰文学の背景を考察する太宰治学習に取り組んでいる。

現在、運動部を7つ、文化部を5つ設置している。運動部では弓道部は少人数ながら県春季大会男子団体において決勝トーナメント進出を果たし、個人戦で4位入賞する活躍を見せている。文化部では地元金木地域で盛んな三味線に取り組む三味線部やボランティア活動を行っているキャリアデザインclubみらい等が特徴的な部活動となっている。

進路状況は、進学と就職がおおむね半々となっている。

校訓は、誠実・進取・建設である。

本校は昭和23年6月に五所川原農林高等学校金木分校として金木小学校に併置された。本校の創立年については、青森県金木高等学校として独立昇格した昭和27年としている。

現在、第1学年は1学級40人募集で17名の在籍、第2、3学年は2学級70人募集で、それぞれ18名、47名の在籍であり、計82名となっている。生徒の出身中学校は、金木中学校、五所川原第四中学校、車力中学校、稲垣中

学校、中里中学校の5つである。多いのは地元の金木中学校、次に中里中学校の順となっている。通学方法は、津軽鉄道を利用する生徒や自家用車送迎の生徒が多くなっている。車力中学校や稲垣中学校出身の生徒は乗合タクシーを利用している。

これまでの卒業生数について、昭和27年の創立から昨年度までの間に、8,184名の卒業生を輩出している。

#### ○板柳高校（平川委員）

本校は、かつて1学年8学級規模であり、校舎は4階建てである。また、野球場、陸上競技場、サッカー場、プール、テニスコートも備わっており、県内有数の施設を備えている。

昭和13年に青森県板柳町立実科高等女学校として設置され、昭和18年に青森県板柳町立高等女学校と改称されており、本校の前身は女学校である。県立移管が昭和29年であり、昭和37年には全日制課程に家庭科が設置された。その後、家庭科は家政科や被服科を経て閉科しており、本校の特色の1つである家庭科教育はこのような歴史が背景となっている。現在の校地・校舎に移転したのは昭和53年であり、40年程度経過している。その後、定員が徐々に減っていく中で、昨年度、創立80周年記念式典を挙行了したところであり、地域の皆様には御協力いただき感謝申し上げます。

校訓は、誠実・勤勉・礼儀である。

第1学年は共通の科目を履修するが、第2学年からは就職を中心としたA類型と進学を中心としたB類型に分かれて学習を行う。本校生徒の進路希望は、4年制大学や専門学校への進学から就職と多岐に渡るため、普通科目に加え商業科や家庭科の専門科目を設定している。具体的には、商業科では簿記や情報処理等、家庭科ではフードデザイン、ファッション造形基礎、子どもの発達と保育等の専門科目を開設し、就職を希望する生徒の資格取得に対応している。

卒業生の進路状況であるが、昨年度は進学が若干多く6割程度であり、就職が4割程度となっている。なお、昨年度は国公立大学に5名合格している。卒業生数は累計で15,342名となっている。

昨年度までは文化部は7つ、運動部は8つあったが、現在、バレーボール部は部員不足により廃部となった。かつては、男子ソフトボール部や空手部の強豪であったと聞いている。硬式野球部は、昨秋久しぶりに県大会に出場している。また、かつてバスケットボール部は伝統的な強豪校として名を馳せたこともあり、女子バスケットボール部はインターハイに出場した黄金期があった。男子バスケットボール部も全国大会のウインターカップに出場したことがあるが、現在は何とか部員を確保して活動している状況である。

#### ○鶴田高校（隅田委員）

昭和26年10月1日に青森県板柳高等学校六郷分校として、北津軽郡六郷村立六郷中学校に併設されたのが、本校の始まりとなっている。昭和49年4

月1日に県立移管等を経て独立昇格し、青森県立鶴田高等学校となった。平成23年10月1日に創立60周年記念式典を挙げて現在に至っている。

誠実・自律・力行を校訓とし、学校標語として師弟和熟を掲げ、教育活動に取り組んでいる。

本校は第2学年から普通コースと国際教養コースに分かれ学習している。また、朝の読書活動に平成10年11月から取り組んでおり、生徒たちは落ち着いた状態で学習に取り組んでいる。

平成4年に設置された国際教養コースでは、英検準2級以上の合格を目指し、英語合宿等の特色ある活動に取り組んでいる。また、地元鶴田町の姉妹都市であるフッドリバー市での研修旅行等も取り入れている。英語科の専門科目としては、総合英語、比較文化、国際理解等を開設している。

普通コースでは、商業科の専門科目である情報処理等に取り組みながら様々な資格取得に挑戦して、生徒の進路達成に役立てている。

進路の状況であるが、昨年度は青森公立大学にAO入試で合格者1名を輩出している。進学と就職の割合はおおむね半々である。

今年度はバレーボール同好会が部活動に昇格し、高校総体出場に向け練習に励んでいる。

このほか、鶴高の恩返しプロジェクトとして、鶴の舞橋写真コンテストを運営するとともに、カレンダーを作成し修学旅行先で配布するなど様々な活動に取り組んでいる。

本校では入学した生徒を大事に育てながら、各生徒の進路達成を目指し教育活動に取り組んでいるところである。

#### ○五所川原工業高校（幸山副委員長）

本校は、工業の専門分野を学習する全日制課程の専門高校である。設置学科は、機械科、電子機械科、電気科、情報技術科の4学科である。

本校は昭和38年に設立され、日進月歩の工業技術と変動する社会情勢に対応でき、かつ創造力豊かで知・徳・体の調和のとれた人財を育成することを教育目標として、これまで12,766人の有為な人財を輩出している。多くの卒業生は、この地域はもとより青森県内及び全国において、日本の工業技術の進歩や産業の発展に、ものづくりを通して大きく貢献している。

本校には、建学の精神として受け継がれてきた学校標語として「全校一体一家族」と「無限の可能」がある。

「全校一体一家族」は、文字どおり本校に集う者は生徒も教職員も家族同様であり、思いやりを持って互いに支え合っていかなければいけないという建学の精神である。

「無限の可能」は、与えられるものには限りがあるが、自分が求めさえすれば求めるものは無限にあり、それを獲得することで自分自身を高めることができるという、更なる成長を意味するものであると考えている。

本校生徒は、自分自身の可能性を信じ、自らの目標を掲げて進路の実現に向

け学業や部活動に励んでおり、就職はもちろん、国公立大学等への進学においても大きな実績を上げている。学校としては、生徒一人一人の生き生きとした学びと活動を支援し、本校で学んで良かったと思える学校、地域の皆様から信頼される学校づくりに取り組んでいる。

本校の特色ある取組として、工業教育に関する取組、学校活性化に関する取組、地域貢献に関する取組の3つを口頭で紹介したい。

工業教育に関する取組としては、各学科において高度な資格取得にチャレンジしている。資格取得状況を比較できる指標として、全国工業高等学校長協会が主催するジュニアマイスター顕彰制度があるが、本校における在籍生徒数に占める認定者数の割合は県内でも上位である。また、本校では各学科の専門的な技術や技能を競う各種技能コンテストに出場しており、県大会はもとより東北大会や全国大会でも上位の成績を収めている。昨年度、高校生ものづくりコンテストの電子回路組立部門では当時の1年生が県大会で優勝し、今年度は東北大会に出場する予定であり、上位入賞し全国大会に進出することを狙っている。高校生ロボットコンテストでは、昨年度、県大会で上位入賞し全国大会に出場している。本校では、これらの取組を生徒のキャリアアップにつなげており、資格取得や技能コンテスト出場に向け身に付けた技術や技能は、企業から高く評価されるとともに、生徒が実社会で自信を持って活躍できる力にもなっている。本校では、実社会に直結した専門分野の知識や技術を学んでいる。

次に、学校活性化に関する取組として課題研究と英語学習について紹介したい。課題研究は、工業高校で学んだ知識を活用して行うものづくりの活動で、知識を技術に変える学習である。校内課題研究発表会は、研究成果の説明など発表を意識した学習活動であり、言語活動を充実させるとともに、思考力、判断力、表現力の育成につながっている。課題研究において、生徒は自らの力でのものづくりを行い発表する過程において、目標設定の手法やプロジェクトの管理法、問題解決、プレゼンテーションの手法を習得している。また、英語学習では「英語でコミュニケーション」を合言葉とし、専門高校としては英語の履修単位数を多く設定している。継続した英語学習を通じてグローバルに活躍できる人財の育成を目指している。

3つ目の地域貢献に関する取組として、本校は五所川原産業まつりに毎年度出展し、課題研究における研究成果の公開と実演を行っている。本校の教育活動を広く地域に紹介し、地域社会との連携を深め、工業高校への興味関心を高めてもらう活動を行っている。また、立佞武多祭りには多くの生徒が部活動単位で参加している。

最後に、本校では、生徒が抱く夢や目標の実現に向け、生徒の力を磨き育む教育活動を充実させていきたいと考えている。そして、家庭や地域の期待に応え信頼される、開かれた学校づくりを推進させるとともに、地域に根ざした教育実践の取組やその成果を積極的に情報発信していきたいと考えている。

## 7 意見交換

### (1) 西北地区統合校における目指す人財像について

■ 委員長から事務局に対し、目指す人財像の考え方について説明を求め、事務局から資料3により目指す人財像として、「社会の一員として地域づくりに意欲的に参画する人財」、「多様な価値観や立場を理解し、多くの人々と協働しながら地域を支える人財」、「ビジネスの基礎を身に付け、地域経済の発展に貢献する人財」、「生活の質の向上に関する知識を身に付け、地域の発展に貢献する人財」、「高度な工業技術を身に付け、付加価値の高い創造的な製品を開発するなど地域産業を支える人財」の5点を基本とする旨説明した。

■ 委員から次のような意見があった。

- 統合校に新たに設置される普通科の教育活動に、現在、各地域で行われている活動を教育資源として活用してほしいと考えている。また、普通科と工業科が併置されるため、普通科の教育活動に工業科の要素も取り入れていけると良いと考えている。個人的には、各地域の活動を取り入れながら、工業や情報の知識を持った国際的にも活躍できるビジネスマンを輩出してほしいと考えている。さらに上級学校を希望する生徒のための進学指導體制を整備できると良い。

各地域の活動については、例えば、金木地域の地吹雪体験ツアーや、鶴田町のフードリバー市との国際交流や鶴の舞橋写真コンテスト等の活動が考えられる。これらの活動を取り入れることで国際的な視野を広げたり、地域の活動への参加により生徒に貴重な経験をもたらすことができると考えている。

- 個人的に最も危惧することは、中学校卒業予定者数が今後10年間で約3,100人、第1期実施計画期間で約2,200人も減少すること、西北地区では今後10年間で約500人の減少が見込まれていることである。

このままでは人口減少がますます進むこととなるが、企業を司っている立場から人口減少を捉えると、生徒数の減少が著しい地域においては、一人一人の生徒が、将来この地域を担っていく上で価値のある人財となると考える。

地域を担っていく価値のある人財を育成するため、生徒が興味を示し関心を持てるようなカリキュラムを設定してはどうか。例えば、普通科の生徒が選択できるように「国際理解」や「国際観光」、社会的な課題となっている「福祉」、ICTやプログラミングを学べる「情報」を取り入れてはどうか。国内外を実際に訪問した経験から、特に、高校教育におけるICT活用に関する教育がますます重要になると感じている。

統合校における特色ある教育活動や、生徒の能力・適性に応じた積極的な取組が非常に重要になるだろう。実社会に順応し地域に貢献できる人財を育成することが最も重要であると思う。

現代はネット社会であり、インターネットを扱うことができなければ就職も難しい時代である。現在、IT関連産業を担う人財は多いように見えるが、全

体的には不足していると感じる。このような中、普通科と工業科が併設される統合校において、学科間で連携しながら、双方の学科において専門的な学習に取り組めると良いと感じている。

板柳高校同窓生や地域の方々は、板柳高校の統合をマイナス思考で考えがちであるが、それらを払拭するためにも、西北地区統合校でなければ実践できない学習活動等、学校の特色が1つはあってほしいと考えている。

また、道德教育に関する時間の設定も検討してほしい。当たり前のことだが、道德教育は非常に重要である。なお、今後の人財育成に当たっては、ロータリークラブやライオンズクラブ等の外部団体による国際交流等の活動も活用すべきであると思う。

- 全国で活躍する人財を育成することは、確かに必要であると思うが、一方で金木地域から若者がいなくなるということを非常に危惧している。全国や世界で活躍する人財とともに、地域を大切にし、地域に根付くような人財を育成する教育も必要であると思う。この2つは矛盾するものではなく、現在はIT技術の進展により、金木地域にいても全国に発信できる環境がある。

また、金木地域には「NPO法人かなぎ元気倶楽部」という団体があり、地域に根付いた活動をしながら、全国に情報発信するとともに全国の方々とのつながりを持っており、本校も同団体と連携して様々な活動に取り組んでいる。統合校には工業科と普通科が併設されるため、IT技術をベースに全国や世界で活躍する人財とともに、地域に根ざし起業する人財を育てるような教育も必要であると考えている。

- 私は、五所川原工業高校機械科の第1回生であり、同校の歴史は創立から背負ってきたつもりであるが、各校の委員の方々も同様に背負ってきたものと思う。今、金木高校、板柳高校、鶴田高校の方々から、地域に根ざした教育、国際理解教育、社会に貢献できる人財の育成等の意見があった。もちろん、教育・人づくりの根本はそこにあると考えている。先ほど、第1期実施計画における西北地区統合校の方向性として、目指す人財像について事務局から説明があったが、只今、委員の方々からあった意見については、既に計画に記載されていることのように思う。この基本的な部分を逸脱しないように今後の議論を進められると良い。

- 委員長から西北地区統合校の目指す人財像としては、第1期実施計画に掲げる5点を基本としつつ、今後、本日の意見を踏まえ検討するよう指示があった。

## (2) 西北地区統合校の学校像について

■ 委員から次のような意見があった。

- 今年3月の高校入試の志願状況を見ると、五所川原高校も五所川原工業高校も定員割れという現実を突きつけられ、私だけでなく地域住民も統合やむなしと感じているのではないか。

西北地区統合校は工業科3学級、普通科2学級であるため、保護者は工業科中心の統合校であると捉えがちであると思う。このような状況にあって、工業科と普通科が併設されている良さを打ち出すことで保護者や子どもに選ばれる学校になるのではないか。このため、統合校の目指す学校像や特色は今までにない斬新なものを打ち出すことが必要である。

統合校の普通科でなければできない新たな取組によって、子どもたちに夢を与えられるようになってほしい。

また、五所川原工業高校においても大学進学者が増えていると思うので、工業科に入学した生徒が進路を途中で変更し、普通科で学ぶようなことがあっても良いと思う。

他県における工業科と普通科の統合事例について事務局にお聞きしたい。

普通科に入学した生徒も夢を持てるような学校像を打ち出せれば、中学校としても統合校への進学指導がしやすくなると思う。

- (事務局) 事務局の職員が実際に訪問した学校として、普通科4学級、工業科2学級、計6学級の熊本県立御船高校がある。この学校は大正10年に熊本県立御船中学校が設置され、昭和23年に御船高等女学校を併合し学制改革により、現在に至っている。なお、昭和38年に機械科・電気科が各1学級併設された後、昭和61年に電子機械科2学級に改編され、平成16年には普通科芸術コースを新設している。

当該高校からは、

- ・普通科特進コースの生徒がロボット部に所属し、工業科教員から電子制御等について学び、その専門性を生かして国立大学に進学したケースがある。
- ・工業科教員の指導により、普通科の生徒が危険物取扱者の資格を取得している。
- ・普通科が併設されていることにより、共通教科の担当教員数が多く、工業科の進学希望者に対し、進学に向けた課外講習や個別指導を実施するなど充実した進路指導が可能となっている。
- ・工業科が併設されていることにより、企業からの多くの求人(約1,200社)があり、普通科の就職希望者の選択肢が広がっている。
- ・他の工業高校では芸術の選択科目が限られているが、芸術コースが設置されていることにより、生徒の希望に応じて音楽・美術・書道から選択させることができる。

以上のことを伺っているので、参考までに紹介したい。

- 今回の統合により工業科の専門高校に普通科2学級が併置されることとなるが、各委員から意見があったように、鶴田高校の国際教養コースや金木高校の様々な取組などの特色を生かしてほしい。そのための具体策は分からないが、今後この委員会で議論し魅力ある学校を作っていければと思う。
- 今までになかったパターンの統合であり、学校の在り方が問われると思う。五所川原工業高校がこれまで築き上げてきたものもあるだろうが、新たに普通科が設置される中でどのような独自性を出していくのかを考えなければいけない。西北地区統合校の普通科が他の普通高校とどのように違うのか、どのようなカラーを示すことができるのか議論していかなければいけない。  
中学生や保護者、地域住民に与える統合校のイメージとして、大学進学ができる、コンピュータに関する学習ができる、外国人との交流ができる等の特色を、開設準備委員会で具体的に検討できるかが重要であると思う。  
第1期実施計画において、「地域づくり」や「地域」が前面に出されている点は良いと思う。国の有識者会議や教育再生実行会議の中でも、地域の在り方がかなりクローズアップされているため、今後、国の提言等の動向を注視しながら、西北地区統合校において、地域との関わりという点でどのようなカラーを出していけるか具体的に検討していかなければいけない。  
現在、社会に開かれた教育課程が求められているため、社会の在り方を踏まえつつ、キャリア教育にも踏みこんで検討することで、子どもたちの生き方や地域との関わりにもつながってくるものと思う。  
しかし、目指す学校像については、現時点ではっきりしたものは見えていない。
- 地域から学校がなくなることで、地域が衰退することを危惧しているため、統合校では地域活性化や地方創生等を含めて取り組めると良いと考えている。
- 先ほど事務局から統合校の開校に向けて計画的に施設整備を進める旨の説明があったが、普通科の生徒が疎外感を持つことのないように配慮した施設整備をお願いしたい。
- いかに普通科に特色を持たせることができるかが勝負だと思う。地域の中学生に対し、統合校における普通科の魅力をPRできるような特色を出すことに尽きる。いかに普通科と工業科を融合させるかという点や、中学生にとって統合校に入学して良かったと思える学校づくりに知恵を絞っていかなければいけない。今日一日では結論は出ないが、これからの会議で検討できると良い。
- 他の委員の意見と同様に、普通科に特色を持たせることが大切であることや、普通科の生徒が疎外感を持つことがないような施設整備をお願いしたいと考えている。

- 第1期実施計画には西北地区統合校の教育活動について、「普通科と工業科を併設するメリットを最大限活用し、普通科の生徒のキャリア教育の充実や工業科の生徒の大学進学等へ向けた基礎学力の向上等に学校全体で取り組み、多様な進路志望に対応する」とうまくまとめている。今後、細かい点は追加していくことになるだろう。ただ、これらの統合校における教育活動を実践する場面で、いかに全職員がこのことに向かえるかが重要であると感じた。工業科と普通科がバラバラではなく、一つの学校の職員として協力し合っていく必要があり、統合校のスタートが重要であると思う。

### (3) 校名案の決定方法について

- 委員長から事務局に対し、想定される校名案の決定方法について説明を求め、事務局から資料5及び資料6により、A案（事前公募方式）とB案（事後意見照会方式）について提示があったほか、西北地区統合校の校名については、地域に親しまれる校名とするため、これまでの校名の付け方と同様に地名を付すことについて説明した。
- 委員長から各委員に対し、校名案の決定方法について意見を求めたところ、委員から次のような意見があった。
- A案のように県教育委員会のホームページで校名案を公募するのであれば、県教育委員会のみで校名案を決めれば良いのではないか。開設準備委員会を設置した趣旨を考えると、委員が校名案を出して議論を進め、最終的に県教育委員会が決めるべきであると思う。
- どちらかというともB案という意見で良いか。
- 良い。開設準備委員会に課せられたものを踏まえると、開設準備委員会で校名案について議論をすべきと思う。
- 統合校の校名案は話題に挙がることが多い。「工業」や地名が残るのかという点は難しい問題である。

委員の方々にも校名案に対する思いはあるだろうし、各校の代表として委嘱されているため、第2回会議で具体的な校名案を出した上で県民に意見照会すると良いのではないか。

中南地区統合校の校名案については、どのように検討したのか。1年先行して開設準備委員会を開催しており先例となるため、それと異なる方法で検討を進めると批判が出る可能性もあるだろう。
- （事務局）中南地区統合校開設準備委員会では、第1回、第2回の会議において、委員の方々から校名案に関する意見をいただき、その校名案について県教育委員会ホームページで県民に意見照会しており、本日の資料で言うとB案を

採用した。現在、県教育委員会で中南地区統合校の校名を検討している段階である。

また、今年度、西北地区と同様に上北地区統合校開設準備委員会を設置し、5月16日に第1回会議を開催したところである。上北地区でも同様の検討を行い、校名案の検討についてはB案で進めることとなった。

- 中南地区統合校は黒石市に所在する高校の統合であり、校名案の選択肢も多くはないと思う。西北地区統合校については、旧市町で言うと4つの市町が関係し、どこかの地域を優先する訳にもいかないため難しい。
- 校名については、各校の思いが一番強い部分であると思う。今回の統合は五所川原工業高校への吸収合併ではないことや、各地域の校名に対する思いもあるため、現時点では意見を控えさせてほしい。
- 校名案の検討は難しい問題であるが、現実的に考えると、統合校の所在地が五所川原市になることは決定しているため、所在地が分かるよう冠は「五所川原」とした方が良いと思う。ただし、それ以降の部分については、工業科と普通科が併設されることを踏まえると総合的というイメージもあるし、そうでないかもしれない。この点については委員の方々の意見も聞いてみたい。
- 校名については、地域や委員の思いがあるため、B案により各自の思いを伝えながら検討するのが良いと思う。
- 委員長が校名案の検討についてはB案で進める旨を確認し、委員から了解された。
- 委員長がオブザーバーに対し、第2回委員会の開催に向けて、各校の教育活動や部活動などの資料作成に協力を求めた。

## 8 閉会

## 9 県立五所川原工業高等学校施設見学